

21 世紀のクラフト再考：欧米の最新研究の紹介と 日本の中小企業研究への示唆

立教大学経済学部教授

遠 山 恭 司

1. はじめに

本稿は、ここ 10 数年来、欧米諸国で活発に議論されているクラフト研究の新たな潮流に焦点を当て、その問題意識、着眼点、切り口、解釈、分類、整理がどのようにおこなわれているかを紹介する。クラフトとは、いわゆる手工業のことであり、日本では地場産業研究や経営史研究において、自営業や零細経営といった事業形態としてわずかに取り上げられるテーマといえる。かつて中小企業研究では、高度経済成長期以降、西ドイツ、イタリア、フランスの手工業の実態と定義、政策に関する研究がおこなわれたが（清成 1969；間芋谷 1969；平 1970；森本 1980；長谷川 1984；長谷川 1985）¹、その後は研究の関心や対象の拡大・拡散にとともに、国内外ともに実情を含めて不案内な領域となっている。

20 世紀後半、欧米諸国と日本はともに経済社会、技術、産業構造、生産システム、制度、慣行など、ほぼすべての面で構造的な変動を経験し、クラフトは産業や研究の周縁部に追いやられていった。しかし、21 世紀に入り、リーマンショック（世界金融危機）、グローバリゼーションと格差の拡大、気候変動問題の深刻化、COVID-19 パンデミックなどを経て経済的価値観が大きく変化するなかで、クラフトという働き方や組織に新しい文脈的解釈や意義、再定義、諸特徴の抽出を試みる研究が欧米で盛んに展開されている。今日の日本でも、こうした研究の進展がわずかながらみられつつある（大田；2019；後藤 2021；大田 2025；遠山 2025；山口 2025）。

ゆきすぎた資本主義の危機に際し、ノスタルジックな懐古主義的な揺り戻しと

¹ 日本でいう手工業は、厳密には清成（1969）が指摘するように、ドイツ語の Handwerk、フランス語の artisanat、イタリア語の artigianato など、言葉も異なれば、その定義や性質も同一ではない。ただ、欧州では「ヘルシンキからローマまで」「感覚的に理解しうる共通の内容」をもつものとされる。また、海外のクラフト概念は日本でいう日用品を指す傾向よりも業種の幅が広い（熊倉 1974）。

してクラフトが注目される向きもあるが、本稿ではそうした浅薄な言説とは一線を画した4編の代表的論文を取り上げる²。

2. クラフト・イマジナリー (Bell et al., 2021)

Bellらは、従来のクラフト概念がおかれていた環境が質的に変化したことをとらえ、「クラフト・イマジナリー (craft imaginary)」というコンセプトを提起している。これは、クラフトの過去と現在の社会的変容を踏まえた新たなとらえ方である。

そもそもクラフトは手工業として位置づけられ、その手仕事の性格から、近代的産業と対比される存在として認識されることが多かった。市場経済システムのもとでは「やや遅れた」存在形態とみなされたり、産業システムの危機に際してノスタルジックな懐古の対象ととらえられたりする傾向が強かった。これに対し、著者らは「ソーシャル・イマジナリー」³という概念を援用することで、クラフトの現代的意義を見出そうと試みている。

ソーシャル・イマジナリーとは、人々が共有する世界の見方や社会のあり方に関する「集合的なイメージ・想像力」、あるいは「意味づけの集合」を簡潔に定義したものである。ゆえにそれは個人的な帰属物ではなく、社会の中で共有され、行動や制度、関係性を形づくる枠組みとして機能する。政治哲学や倫理学、社会学などの領域では「市民社会」や「近代国家」の考察に用いられ、経済学や経営学領域に近い組織論においては、「クラフトがもつ手仕事、地域性、真正性」といったものがイマジナリーとして存在・機能することを考察対象としている。

イマジナリーの特質として、①歴史的に構築され、変化しうるもの、②集団によって共有・再生産されること、③現実を構成するだけでなく、変革の可能性をもつこと（未来を創造しうる）、などがあげられる。著者らは、これらの特徴を世界金融危機以降の欧米社会で顕著になった資本主義システムの制度的ほころびと

² 掲載誌は *Organization, Organization Studies, Organization Theory, Academy of Management Annals* の4誌で組織論研究が多い。これらの文献を案内してくれた大田康博教授（駒澤大学）に感謝申し上げます。このほか、直近のレビュー論文では、Roy, M. & Sarkar, A. (2025). Craft approach to work: a humanist model of work in organizations. *Management Review Quarterly*, 75 (1) などがある。

³ C・テイラー（2011）『近代 想像された社会の系譜』（上野成利訳、岩波書店、原著2004）を参照。

結びつけることで、「過去のクラフト・イマジナリー (imaginary of craft in the past)」を超え、「未来志向のクラフト・イマジナリー (future-oriented craft imaginary)」の確立を試みている。

過去のクラフト・イマジナリーがノスタルジックな懐古主義に留まるのに対し、未来志向のクラフト・イマジナリーは社会やコミュニティ、組織や個人との関係性のもとで、歴史、伝統、場所、身体を通じて統合・形成される。そして、クラフトによるイノベーションや社会的包摂を促進する可能性を主張している。ここでいうイノベーションは、絶え間ない新規性や資源の浪費を前提としたものとは異なり、クラフトにおける物質性（モノそのものや、モノにともなうサービスを含む）と身体性（動作や所作をとまなう技能や技術）を、新しい知識や知的文脈と融合させることで、これまでにない価値を提供すると考えられる。

この革新性がもつ集合的なイメージや想像力、意味づけの集合は、モノ・サービスの提供側であるクラフトばかりでなく、需要する消費者側にも広く共感をもって受け入れられる。その結果、既存の組織が築き上げた経済合理性を至上命題とするシステムとは性質を異にして、独自の市場が形成され、それなりに持続する。供給側のクラフトの担い手には、クラフトビールやキッチンカー、シェフ、バーテンダーといった事業に参入する高学歴の中間層が多い（表1）。これらの事業は、これらの「身体をとまなわな知識労働」からの代替手段として選択されている。

表1 紹介4論文が考察対象とした既存研究で取り上げられたクラフト業種

	Bell et al. 2021	Kroezen et al. 2021	Gandini & Gerosa 2023	Rennstam & Paulsson 2024
クラフトビール	○	○	○	○
蒸留酒	○	○	○	○
レストラン・シェフ・精肉	○	○	○	○
ワイン・シャンパン	○	○		○
都市サービス		○	○	○
ファッション	○		○	○
Etsy.com 上のアルチザン起業家		○	○	
メイカームーブメント		○	○	
ベーカリー				○
楽器	○			
映画・アニメ		○		

注：Kroezen et al., 2021 は Creative Craft の論述パートのみが対象。

出所：各論文より筆者作成。

さらに著者らが未来志向のクラフト・イマジナリーと過去のそれとの区別で強調するのは、過去のクラフト・イマジナリーが白人・男性・労働者階級を典型とした社会的認識によって、女性・有色人種・非伝統的技能を周縁化し、不可視化してきたことへの批判である。つまり無意識的に形成されてきたジェンダー化され人種化された古いクラフト・イマジナリーの限界性を超えて、その担い手の属性の多様性や開放性、包摂性をともなうクラフト・イマジナリーを、未来志向によって現代的に再構築することを提唱している。そして、この新しいクラフト・イマジナリーが、グローバルな産業消費社会で前提となっている現代的・社会技術的なイマジナリーの代替となり、より社会的かつ経済的に持続可能な生産と消費への移行につながる重要なステップとなると主張している。

3. 現代的クラフトの分類構成 (Kroezen et al., 2021)

本論文は、過去一世紀にわたる社会科学領域の 453 本におよぶ学術論文⁴にて、クラフトがどのように扱われてきたかを帰納的かつ大局的に整理した解釈論的レビューである。クラフトは時代や文脈によってその現れ方が多様なため、「共通した理論的基盤の欠如により、これまでの知見は断片的であった」。Kroezen らは、クラフトを「人間的関与を機械的制御よりも優先させる、時代を超越した人間中心的な仕事のアプローチ」と再概念化した。

そもそも欧米社会では、機械が労働に取って代わるものとして敵対的にとらえられる傾向が強く、また、企業・組織の巨大化と大量生産体制がそれを実態化するにつれ、クラフトは周縁部へ追いやられた。21 世紀になって、ゆきすぎた資本主義やその実行装置としての巨大組織のもとで働くことに価値を見出せない人々が、クラフトを代替的な働き方として選択する傾向が出てきた。そこには、「機械では再現不可能であり、純粹に機械的な労働様式では失われてしまう『人間の手の感覚』や『個別的判断』といった要素に価値を見出す」クラフトの再発見がおこなわれている。文献レビューから浮かび上がるクラフトの働き方とは、人間的なスキルとしての熟練 (mastery)、全方位性 (all-roundedness)、身体化された

⁴ ここでは、社会学・経営学・組織論などの主要ジャーナル 17 誌のことをいう。分析の際に用いられたキーワードは、craft, artisan, handwork, guild, maker, master, skill, technique, workmanship などである。

専門性 (embodied expertise)、態度としての献身性 (dedication)、共同性 (communality)、探求性 (exploration) に依拠している点に特徴があるとしている。

その上で、かれらはクラフト研究群の分類を試みている。具体的には、従来のクラフト理解が「伝統的クラフト (traditional craft)」と「産業化されたクラフト (industrialized craft)」であったのに対し、21 世紀の現在においては、「ピュア・クラフト (pure craft)」、「テクニカル・クラフト (technical craft)」、「クリエイティブ・クラフト (creative craft)」の3類型からなることを提起する。

大胆に単純化すると、伝統的クラフトは前近代的な手工業の仕事や組織のことで、その後の大企業体制や科学的管理法、大量生産システムの発展にともなって周縁化されたクラフトを指し、中世ヨーロッパにみられたギルドを想定するとわかりやすい。その後、これらの仕事や組織において機械の導入や科学的管理法の採用、官僚的で階層的な組織・人事制度が幅広い産業で取り入れられて、人間による統制を失う職場と仕事・組織が増大し、そのメカニズムの研究群が「産業化されたクラフト」研究となった。現場の自立性が喪失され、職務が細分化され、かつて H・ブレイヴァマンが指摘した「脱スキル化 (deskilling)」⁵された産業労働社会の諸問題などが数多く議論された。

次に、著者らが独自に提起する新しいクラフト研究3類型は、まさに、産業化されたクラフトのなかから、あらためて人間と機械の力関係のバランスをうまく両立させた観点からの研究群を整理したものである。それは、大量生産システムのオルタナティブな側面として、ドイツやイタリア、日本の柔軟な生産システムの一部に内包されたクラフト的な仕事や組織の発見から生まれた。「柔軟な専門化 (flexible specialization)」⁶を想像すればイメージしやすく、これをテクニカル・クラフトとした。テクニカル・クラフトでは機械や道具への依存度は高いものの、作業者は自律的に製造に関与し、機械は人間の感覚・スキルの拡張ツールとして活用され、技術的卓越性や高い品質、継続的なカイゼンを実現することに重きがおかれる。

⁵ H・ブレイヴァマン (1978)『労働と独占資本』(富沢賢治訳、岩波書店、原著 1974)を参照。

⁶ M・ピオリ& C・セーブル (1993)『第二の産業分水嶺』(山之内靖・永易浩一・菅山あつみ訳、筑摩書房、原著 1984)を参照。

第2の類型は、テクニカル・クラフトと対照的な位置づけにあるピュア・クラフトである。そこでは人間の技能や態度が徹底的に優先され、機械的な要素が排除される傾向が強い。いわば、「反産業的な純粋性 (anti-industrial purity)」が追及される分野である。ピュア・クラフトは伝統的クラフトに似ているが、クラフト的スキルや態度への観念的なこだわりがより強調され、純粋な製作技法を再発見・再構築するための努力、すなわち「探索」の姿勢が全面に出てくる点で特徴的である。また、そこでは美的センスの追及や歴史的遺産をとまなう伝統的コミュニティとの結びつきも強い。その意味で、ピュア・クラフトは日本における伝統的工芸品とその産地的な諸特徴に近似している形態と理解できる。

最後に、現在のクラフト研究の潮流にある一群を、著者らはクリエイティブ・クラフトと命名する。ここでのクラフトのあり方は創造性を追求し、個人の自由や自己表現を探究する態度が際立っている点に特徴がある。その点で、機械を媒介とした技術的完成度を重視するテクニカル・クラフトとも、ノスタルジーに根ざした純粋主義的なクラフト原則を集団的に重視するピュア・クラフトとも異なる。つまり、クリエイティブ・クラフトは個人の関心を追求し、技法を探究・発展させることや、自身のアイデンティティを表現するようなユニークな製品・サービス（革新性、独自性）を創り出すことに内発的な価値を見出している。さらには、他の2つのクラフトに典型的な徒弟制の知見によらずに、個別の才能や直感的な知見に依拠するのがクリエイティブ・クラフトである。したがって、クリエイティブ・クラフトの学習や実践、協働は、すでに確立された排他的なコミュニティではなく、インフォーマルだが支援的なコミュニティにおいて実現される。

4. ネオ・クラフト・ワーク (Gandini & Gerosa, 2023)

21世紀にはいり立ち上がったクラフト産業への着目とその意義の探求のうねりは、「クラフト第三の波 (third wave of craft)」とみなされ、そのなかで提起された労働のあり方のひとつに「ネオ・クラフト (neo-craft)」の議論がある。その対象産業は、従来からクラフトとみなされてきた日用品製造業だけでなく、クリエイティブ産業や文化産業にも広がり、代表的な事例はクラフトビールに関する研究であった。記述的事例研究が蓄積され、ネオ・クラフト産業では「クール

ネス（かっこよさ）」や「疎外感の少ない労働」に特徴があるとされたが、理論的研究の推進が求められるという観点から、Gandini と Gerosa がその理論的概念化を本論文で試みた。

かれらは、ネオ・クラフト労働は 21 世紀の特徴的なポスト産業的クラフト労働の形態であるとして、かつては低位に分類され労働者階級によって担われてきた仕事が、次のふたつの概念によって構成されるとした。ひとつが労働集約的で手作業によるクラフト的实践と価値を統合することで、新しい地位を生み出す活動としてふたたび意味づけ（「再意味づけ」）されたことである。もうひとつは「言説的实践（discursive practices）」と「物質的实践（material practices）」とが不可分に結びつく「言説的物質性（discursive materiality）」という特定のプロセスの結果として、新たな意味づけが付与されたことである。これにより、ネオ・クラフト労働は従来の産業労働に対する代替であるばかりでなく、「ブルシットジョブ」への根本的なオルタナティブに位置づけられると主張する。

ここで議論されるクラフトとその労働は一般的な消費トレンドを反映したものではなく、一定の技能や技術、素材をもちいて生み出される真正性（本物らしさ）という価値を創出する文化的労働として再意味づけされる。ここでいう文化的とは、著者らによれば、「ヒップスター文化（hipster culture）」のことである。ヒップスター文化は、本流にある文化から少し距離をおいた、個性、ユニーク、奇抜なトレンドにある文化で、一般的な解釈ではいくぶん否定的響きをとまなうことが多い。しかし、ここでは大衆的流行とは距離を置いた、特定分野の真正性に感応する人々に支持される文化領域と肯定的にとらえられている。著者らはこれを「周辺の差異性（marginal distinction）」の実践とよび、ネオ・クラフト労働がここで真正性の価値を付与する機会が現出しているとしている。さらに、ポスト産業社会において、これまでと異なる新しい地位と職業がそこに形成されているというのである。

つまり、産業化され、大衆化された商品や消費とは距離を取り、みずからの価値観や意思にもとづいた選択的な消費や需要に対し、その供給者としてネオ・クラフトの形態をとるマイクロ起業家や給与労働者が出現し、そこに新たな市場や労働機会が成立していることが、さまざまな研究から明らかになっていることを総括している。

「言説的物質性」とは、言説的実践と物質的実践が不可分に結合し、それらの根源的な相互作用がクラフト労働に意味を与える特定のプロセスであると定義される。言説的実践とは言葉や物語、知識、文化的背景などのことで、物質的実践は手作業による加工や製造という身体的行為とその結果から生み出される物理的な製品のことである。このふたつが相互に作用し合うことで、新しい意味や価値が生み出されるということである。すなわち、言葉や意味が物質に宿り、物質が言葉や意味を帯びるといったような動的な関係性が、これらふたつの実践のあいだにあるということを想定した概念である。やや抽象的にすぎる議論であるため、著者らは具体例として、ネオ・クラフト実践者らが「有機栽培」や「アップサイクル」、「3D プリンター」、「SNS 情報発信」などによる言説的実践を、物質的実践に結びつけていると説明している。

ただし、この言説的物質性はネオ・クラフト労働に特有のものではなく、従来型の伝統的なクラフト労働にも備わる可能性があるとし、両者を区別するのはその関与の具体的な形態だとしている。従来のクラフト労働が伝統技術や文化にもとづいて言説的物質性を体現するのに対し、ネオ・クラフト労働は先に論じた「周辺の差異性」という言説的実践に必ず関与しているところに特徴がある。

ネオ・クラフトに関する議論については、理論的にも実証的にもさらなる研究の進展が求められると著者らは述べている。とりわけ、かつてときおりみられた「創造的労働 (creative work) 論で生じた学術的美化 (academic glorification)」⁷を避けるためにも、批判的研究の進展が不可欠だと注意を促している。

5. クラフト・オリエンテーション (Rennstam & Paulsson, 2024)

Rennstam と Paulsson が提唱するのは、「クラフト・オリエンテーション (craft orientation : 以下、クラフト志向)」という概念である。ここでは、産業志向 (industrial orientation) とブランド志向 (brand orientation) をクラフト志向と相対化し、20 世紀までの成長至上主義ともいえる産業消費社会から、ポスト成長・脱成長型の経済社会へ移行するのに有効なツールボックスとして、クラフト

⁷ 詳細を語るほどの知見や技量は持ち合わせていないが、学術研究にもトレンドや流行は存在し、無批判に時流に乗るような研究姿勢を批判しているものと考えられる。

志向の意義と論理を提唱した。

産業志向はいわゆる効率性重視の規模の経済性追及という企業経営の一般論理とそれに呼応する大量消費を意味し、ブランド志向はその消費行動が社会的地位の向上手段として機能するステータス消費（顕示的消費）として、クラフト志向とは対極をなしている。クラフト志向は、労働と仕事においては労働集約的であるものの、安易な雇用増の見込めないポスト成長経済においてはその技術・技能が「自立共生の道具（tools of conviviality）」⁸であり、地域の経済循環をうながす「社会的代謝（social metabolism）」⁹のあり方によって、既存の構造に補完的で代替的なものとして機能すると主張している。

「より多くが良いこと（more is better）」の経済論理ではなく、クラフトのもつ要素である「より少なく優れたもの（fewer better things）」の追及が、「より少なく、よりゆっくりな（less and slower）生産と消費」という持続可能性の実現において拡張性をもつ。つまり、著者らの仕事は、新潮流のクラフト概念の議論とポスト成長・脱成長経済の議論を学術的に架橋し、後者の大局的な論説である持続可能な経済社会の構築に、具体的かつ実証的な担い手（社会運動）とその論理を提供するという位置づけとなる。ここではクラフト実践者個人の持続可能性への意識や価値観、態度といったことではなく、クラフトという行為・実践そのものに内在する特性が持続可能性を志向する生産活動にあるという着眼にもとづき、orientation（志向）という概念を使用している。ゆえに、クラフト志向を単なる職人的生産活動（いわゆるアルチザン）という範疇にとどめず、脱成長時代の新しい組織形態や規範を創出する実践的諸活動の可能性を有するものととらえる立場にある。

そこで、著者らはクラフト志向が次の3つの要素で定義されるとしている。①仕事をそれ自体の価値のため丁寧におこなおうとする欲求に導かれた活動、②機械による制御や標準化、効率よりも人間の関与を優先すること、③生産対象との関係を道具的ではなく「知識生成的（epistemic）」¹⁰ととらえること、である。

⁸ I・イリイチ（2015）『コンヴィヴィアリティのための道具』（渡辺京二・渡辺梨佐訳、ちくま学芸文庫、原著1973）を参照。

⁹ エコロジー経済学などによる考え方で、ここではポスト成長・脱成長の議論の文脈による。Martinez-Alier, J. & Muradian, R. (eds.) (2015). *Handbook of Ecological Economics*. Edward Elgarなどを参照。

①は、クラフトという仕事と労働の向き合い方であり、能動性や主体性といった内発的動機を多分に含んでおり、一般的な給与労働者のような与えられた職務を責任の範囲内で従事する向き合い方とは一線を画している。②については、仕事と労働のプロセスにおいて効率性を追求するための機械制御や標準化よりも、従事者である人間そのものの関与のあり方を優先するということである。これは人間的関与を犠牲にした効率性の追求ではないという意味であり、クラフト志向がまったく効率性を重視しないということではない点に注意が必要である。③でいう知識生成的（epistemic）とは、素材・加工対象物は単なるモノではなく、扱いながら学び続ける対象であり、知識の獲得と深化が絶えず発生する関係性の対象であるという考え方によるものである。その関係はモノと生産者ばかりでなく、その消費者（クラフトに関心をもつものやそのコミュニティ）とも経済的利益だけでなく、人と人をつなぐ知的な結節点ともなりうる点が強調される。

このようなクラフト志向について著者らは、クラフトという概念がポスト成長時代において代替的な組織のあり方の形成と変容を牽引する可能性に着目した Bell et al. (2021) の立場（craft imaginaries）に賛同を表明している。そのうえで、クラフト志向とその運動が労働集約的ではあるが雇用を創出し、そこでクラフトらは対象物との知識生成的関係を築くことによって意味のある仕事を提供すると述べる。クラフトがポスト成長時代の実在的な担い手として、社会変革をうながす可能性への道筋を示したのである。

6. おわりに

クラフト研究に関する日本と欧米における彼我の関心の差異は、ひとつに世界金融危機後の大量解雇や COVID-19 パンデミック後の「大いなる退職（great resignation）」の有無に由来するのではないかと考える。成長至上主義による資本主義的価値観への疑問や現代社会の危機に対する問題認識は日本においても共通しているが、その帰結として顕現した社会動態のスケールの違いによるのではないか。その原因や帰結を解釈する分析視角として、クラフトへの注目と関心が猛然と喚起されたのではないかと思われる。

日本でも先見的な大田（2019）の研究成果や後藤（2021）による問題提起とあった仕事があり、筆者もその影響を多分に受けているが、国内の研究は緒に就

いたばかりといえよう。本稿は海外研究を紹介することに終始した小論だが¹⁰、欧米諸国での活発な議論からの豊かな学術的成果を今後の日本の中小企業・クラフト研究に架橋する基礎的作業は謙虚におこなうべきであり、そこから得られる示唆もそれなりにあろう。最後に、残された課題は多いが、筆者としては日本の先達に倣い、実態調査を踏まえた日本独自の考察を展開していきたい。

【参考文献：欧文】

- Bell, E., Dacin, M. T. & Toraldo, M. L. (2021). Craft imaginaries –past, present and future. *Organization Theory*, 2(1).
- Gandini, A. & Gerosa, A.(2023). What is ‘neo-craft’ work, and why it matters. *Organization Studies*. DOI: 10.1177/01708406231213963.
- Kroezen, J., Ravasi, D., Sasaki, I., Żebrowska, M., & Suddaby, R.(2021). Configurations of craft: Alternative models for organizing work. *Academy of Management Annals*, 15.
- Rennstam, J. & Paulsson, A.(2024). Craft-orientation as a mode of organizing for postgrowth society. *Organization*. DOI: 10.1177/13505084241231461.

【参考文献：和文】

- 大田康博 (2019) 「起業家による持続可能なクラフトの創造：天然染色工房『宝島染工』の事例」『経営研究（大阪市立大学）』第 69 巻第 3・4 号
- 大田康博 (2025) 「テキスタイル産業における中小企業の競争・協調行動の変化：産地内外の『制度的外部者』によるクラフト志向の市場創造」『日本中小企業学会論集』第 44 号
- 清成忠男 (1969) 「ドイツにおける手工業概念について：中小企業問題国際比較研究の一前提」『経済志林（法政大学）』第 37 巻第 2 号
- 熊倉順吉 (1974) 「クラフト再考：主として産業的側面から」『デザイン理論（大阪大学）』第 13 号
- 後藤将史 (2021) 「クラフトワークの組織論研究と日本：竹内好を援用して」『国民経済雑誌（神戸大学）』第 223 巻第 6 号
- 平実 (1970) 「ドイツにおける手工業者擁護思想の源流について」『経営経済（大阪経済大学）』第 7 号
- 遠山恭司 (2025) 「手仕事の市場、自立共生 (Conviviality) の世界：産地スクールを基盤とした創造的

¹⁰ 筆者の独自の議論の展開については遠山（2025）を参照されたい。

クラフトの勃興」『日本中小企業学会論集』第44号

長谷川秀男(1984, 1985)「フランスの手工業的企業1・2」『高崎経済大学論集』第27巻第2号、同
第27巻第3・4号

間芋谷努(1969)「中小企業政策の決定機構：イタリアにおける手工業保護政策の硬直性をめぐって」
『産業経済論叢(京都産業大学)』第4巻第1号

森本隆男(1980)「ドイツにおける手工業の研究と研究所の役割」『中小企業季報』1980年第2号

山口隆之(2025)「手工業と工芸職」同『フランスの中小企業政策 小規模企業・中堅企業・クラス
ター』関西学院大学出版会所収